

はやわれも一つの單位と散るべきぞ日夜ただならぬものどちら過ぐ

すさまじくあるべくぞして四邊には百花撩亂の咲きあるなり

幾何いくげを今は富みたりと言ふべきか夕陽を没るる海にむきつつ

堪えがたくありどをおもふ日日にしてさるすべりの花は無爲に散りつぐ

注射器のただ一つをぞ持ちたえて生きながらふるいのちと言ふや

枯草に五體投げ伏してかくばかり似つかはしげに死にて居りたり

陸橋をわが渡るときいらいらと拳握こぶみらする錯覺さくごくがありき

柵しらみの人の世の變うつさもわかちあひて君とわがうへの秋深みゆく

河原邊

上田 一夫

たゝなはる層雲にしるく影を印し鳶輪を描く晝の河原邊

宵ぬちの街にしありて見上ぐれば望近き月照りてしづけき

朝の陽の竹群透きてゆるゝ光み寺の墓地に想念しづむ

故郷に歩み移して悲しむは昔に變らぬ山の色かも

山嶺の雲晴れゆけば岩肌のたちはだかるが現はれて來ぬ

蟋蟀を窓邊によりて聞きをればさびしらに浮ぶ父の面影

の醫學ではそれは殆んど不治の病とされてゐる。(今、母の病室を出て来て私が、思つたより元氣な姿を見て、この分では……と考へてゐた事も、この祖母の一言は餘りにも辛辣だつた。私は失望のどん底にたゞきつけられて、たゞ茫然として何事を語る勇氣もなかつた。

「きつと立派な者に成つてお母さんを喜ばせてやるのだ。」といふ様な事がある一つの望みともして一年前に母に別れを告げた私が今日この様に變り果てた母に逢はふとは……私は何とも云ひ知れない悲しみに胸がつまる様な思ひだつた。

祖母(母方の)はその十日程前静岡からわざわざ来て母代はりに色々家の中の面倒を見てゐて呉れた。私にとつてはいつもなつかしい祖母であつた、私が身延に學ぶと聞いて誰よりも一番よろこんで呉れたのもこの祖母であつた。その日も温顔に微笑を浮べながらあたゝかく私を迎へて呉れたのだつた。

親が子を看るといふ事に對して不思議は

虫の聲聞きつゝあれば向つ峯に月は寂けく浮び出でたり

奉祝歌

田川惠良

神垣に御代安かれと祈るこそ我が國民の誠なりけれ

大君の御代をし禱る神桓や豊葦原は浦安の國

和みゆく日の御光を浴びつゝも興亞奉公日に汗を流せり

天地のみことかしくみ祈りけりさかゆる國の年な迎へて

淺月夜ほのかに香ふ梅園にひとりし佇てば心ふるへぬ

雜詠

鈴木美成

こぞ逝きし母を思へば薄野の露けきなかに虫の聲する

寂かなる麓路ゆけば山川の流れがくたく十五夜の月

端居して庭にむかへば草むらにとりどりに鳴く秋虫の聲

石切場に眞夏目てれば鑿つかふゆゝしき肩の肉付きを見つ

すだれ取る秋も來にけりこの年も無爲に過しと思ふ我かも

ないけれど、今、年老いた母親は何人かの子の母であるところのその子の爲にあらゆる看護の努力を續けてゐる。母にしてみればこの年になつてもまだ親に心配を掛ける親の氣持に對しても石にかぢりついても必ず病魔を克復せねばならない。祖母にすれば病床に苦しむ我が子の爲に、或は幼ない孫達が無心に遊びたはむれてゐる様を見るにつけても、どうかしてきつとなほしてやらねばならない、年老いた母に看られるその子、不治の病にある子を見る、その母親私はこの祖母と母、看る者看られる者、相互の心中を思ふても腸をえじられる様な苦痛を感じずには居られなかつた。

それから三月に入ると祖母の献身的看護の甲斐もあつて母はしばらく起きて歩ける位にまでなつてゐた。祖母も安心して歸郷されたのだつた。

併しこうゆう状態も長くは續かなかつた五月の半ば頃になつて急に病勢は悪化していつた。長い病床生活は母の体をしてすっかり衰弱させ、加ふるに餘病を併發するに